

新羅王京の造営計画についての一考察

黄仁鎬

- I. はじめに
- II. 最近の発掘成果からみた新羅王京の区画整備の様相
- III. 新羅王京の造営計画の変遷相
- IV. おわりに

要旨 本論文は、新羅王京の造営計画を最も良く反映している道路（敷地）や坊牆など標識的な遺構を対象にして、王京内の都市整備の変化相を追跡、復元することを目的としている。新羅は、6世紀から王権の伸長による制度や体制の整備を本格的に実施し、これとともに新しい都市計画（坊里制）を基礎とした王京の改編を推進した。しかし、この改編は当時の政治的状況などから、一度には実施できず、少なくとも三段階をへて、王京の中心部から外郭に向けての都市整備が漸進的になされたものとみられる。発掘の結果、段階別に460×460尺、440×440尺、450（東西）×350尺（南北）と少しずつ修正された地割体系が確認されているが、おおむね新旧地域は有機的に結びついている。最近の月城南側地域の調査を通じて、380×380尺のまた異なる地割痕跡が確認され、その他外郭地域でも斜格子形態の変形地割が確認されて、王京内の都市整備の多様性を探ることができるようになった。

キーワード 新羅 王京 坊里制 道路敷地 街区 地割 均等分割方式 通坊

I. はじめに

古代都城は、ひとつの国の首都として政治・経済の中心地であると同時に、当代最高の文化の総集散地であることができ、民族文化の根幹をなす古代国家の本質と歴史的存在性を明らかにするうえで、とても重要な部分を占めるといえる。その他の個別遺跡とは違い、複合的な構造と性格を帯び、その規模もまた広大であり、古代都城の調査は長い時間と多くの努力を要さざるを得ない。ゆえに、これまで、古代文化圏別にその実態究明や復元作業は、中長期の学術調査を持続的に成し遂げることができる、国家指導下で主に行われてきたのが事実である。

新羅の正宮である慶州月城、東宮と月池、推定北宮跡（殿廊址）をはじめとする王京地区、百濟漢城期のソウル風納土城、扶余泗沘都城、武王代の益山王宮里遺跡などの一部が国立文化財研究所によって発掘され、継続して調査中である。また、近年では南北韓が共同で高麗宮城である開城満月台を2ヶ月にわたって試掘し、2007年9月初旬には2次調査を目前にしている。高句麗や渤海関連遺跡についての海外調査を継続拡大していくという努力は、大変重要なことと評価できる。

しかし、早くから古代都城についての専門的な調査と、学界の関心の中で深度のある研究が進行している日本に比べ、韓国にあって古代都城の研究は、最近の一部の研究成果を除くと依然として大きな進展を見ることができないのが実情である。これまで、先史分野と古墳中心の歴史考古学に集中した韓国考古学界の関心の外で、少しずつ歩みを重ねてきたといえる。

宮城を頂点として、都城の全域にかかる碁盤目形態の大規模な条坊街区を計画的に実施、運営するいわゆる中国式都城制は、南北朝時代をへて定型化が始まり、隋唐代にいたってその完成を遂げた。これは、『周礼考工記』に記されている思想的背景を根幹とし、王権中心の厳格な支配体制の確立手段という、強い政治的目的性が内包されている。ゆえにこのような都城制は、各国の政治的状況と権力の威厳の中心、外交ルートなどによって程度の差もあるが、周辺国の都城造営や整備にあって少なからず影響を及ぼしたものと推測される。

6～7世紀頃の新羅は、対外的に勢力版図の優位を占めるために百濟、高句麗と熾烈な競争合いをみせると同時に、内部的には王権確立や体制整備を行うために多様な試みを並行してすすめた。そのひとつとして、新しい都市計画（坊里制）を基礎とした王京中心部から外郭への段階的な拡大整備をあげることができる。

都を長い期間ひとつの場所だけに置いた新羅であるがゆえに、当時主流をなした中国式都城制の適用パターンが他の都城に比べて大きく異なっていたことは事実であるが、格子

形の道路網を整備し、家屋と主要施設を規格化された街区内に配置して管理することなどの基本的な特徴は、新羅王京でも確認されている。

いまだに、三国統一を前後する時期に、王京整備が一時に行われたと見る見解もあり、王城の位置や変遷過程についてはなお意見が入り乱れているが、月城が王京改編に際して計画的な都市整備の基準となる中核の役割をになったという点に対しては、大きな異見のないところである。このように新羅王京研究において、王城（月城）との関係が重要な部分と認識されているが、より深い研究成果が要求されている現状である。

最近開かれた慶州月城関連学術シンポジウムの基調講演の内容のように、金城、月城、新月城、半月城、満月城など新羅宮闕についての断片的な文献記録は、それなりに残ってはいる。ただ、その正確な位置や変化相を王京の段階的な変遷と関連づけて考察するには、相反する史料が多く、考古学的な検証作業が必ず伴わなければならない¹。

したがって、まず、最近の慶州地域の古代都市遺跡についての考古学的な発掘調査を中心に、新羅人の王京造営について検討することとし、初歩的で粗略な本文叙述に先立って、これまで新羅王京の研究に積極的になれなかった自らに対しての、刷新の契機としたいと思う。

II. 最近の発掘成果からみた新羅王京の区画整備の様相

近年、各種開発事業と関連する緊急性の高い遺跡発掘が急増しており、このような情勢から、慶州でも新羅王京内の様々な都市遺跡が続々と確認されている。

そのうち、韓国文化財保護財団の文化財調査研究団が調査した慶州市東川洞696-2、697-13番地一帯の共同住宅建設敷地内遺跡は、遺構の構成や規模において注目すべき王京遺跡の一つである。この遺跡は2005年の試掘に続いて、2006年1月から2007年5月にかけて発掘が実施され、統一新羅時代または朝鮮時代と推測される建物址関連の遺構と道路遺構、生産関連遺構、井戸、石造遺構などが確認された²。

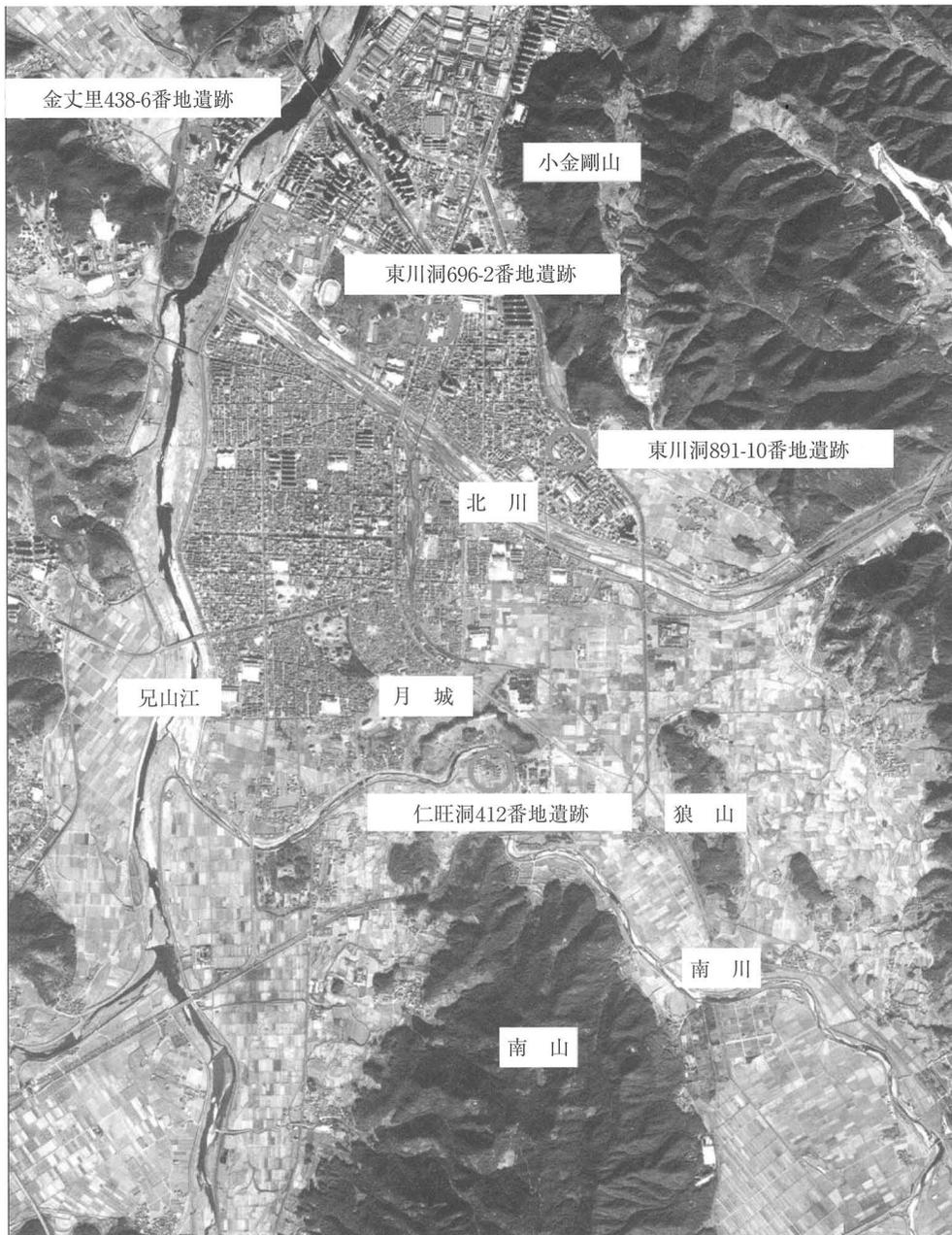
遺跡が位置する場所は、慶州盆地北辺の中央にあたり、西側は隍城公園に面しており、東側には1990年代後半に調査された東川洞690-3番地遺跡³と、東川洞681-1番地遺跡⁴等が隣接する。

これらの遺跡が分布する慶州東川洞一帯は、隍城洞、龍江洞などとともに新羅王京の北外郭にあたる北川以北地域で、8世紀に入って行なわれた王京の最終拡大改編地域内の一つである。

東川洞696-2番地遺跡⁵では、統一新羅時代に造営された東西、南北道路が十字に交差して確認されたのにもない、近隣の王京遺跡で調査された道路網との比較検討を通して、東川洞一帯の都市区画の様相を明らかにする主要な手がかりが提供された。

筆者はさきに、東川洞681-1、690-3番地遺跡の資料を根拠にして、東川洞一帯を含む最終三段階の都市計画の地割体系が、道路敷地20尺（7.1m）と東西430尺、南北330尺の長方形宅地（街区）を基本単位にして、東西で450尺（159.75m）ずつ、南北では350尺（124.25m）ずつ区切っていく分割法を採用していたという仮説（黄仁鎬 2004 p.68）を提示した。

ここで、新たに確認された東川洞696-2番地遺跡の交差路遺構を当てはめることで、この



第1図 慶州市 衛星写真

仮説についての検証を試みよう。

第2図は、2つの長方形街区とこれを区画する道路網が確認された近隣の東川洞681-1、690-3番地遺跡と、今回調査された東川洞696-2番地遺跡の相互の関係を示すために図式化したものである。この図面のように、王京地割の代表的な標識遺構である交差路に接しているナムジャン（塀・垣・囲いなどの総称：訳注）の直交地点を任意の座標で定めることとし、以前に設けた「東川洞座標1」と区別して、東川洞696-2番地遺跡交差路の南西隅を「東川洞座標2」とした。二つの遺跡間の距離ならびに造営方位を比較検討してみると次のようになる。

まず、東川洞座標1・2を中心に、一つの周辺道路網と街区の配置方位が全てN-8°-E内外であり、2遺跡が現在の磁北から東へ多少ふれた真北方向を基準にして造営されていたことがわかる。これは王京整備が始められた月城と皇龍寺付近の中心部や、その外郭の二段階改編地域とも同じ造営方位をなしている。王京の最終拡大改編当時には、土地の効率的な活用のために河川や山地周辺で一部斜格子地割も施行されたものと考えられるが、地形の影響を比較的受けにくい北川以北の東川洞の平地においては、既存の道路網との有機的な関係のために真北方位を維持したことがわかる。

次に、上記の遺跡の街区ならびに道路の区画尺度について比較しよう。まず、2つの座標間の距離や方位を調べると、東川洞座標2は、座標1から同じ軸線上で西へ約330m離れて

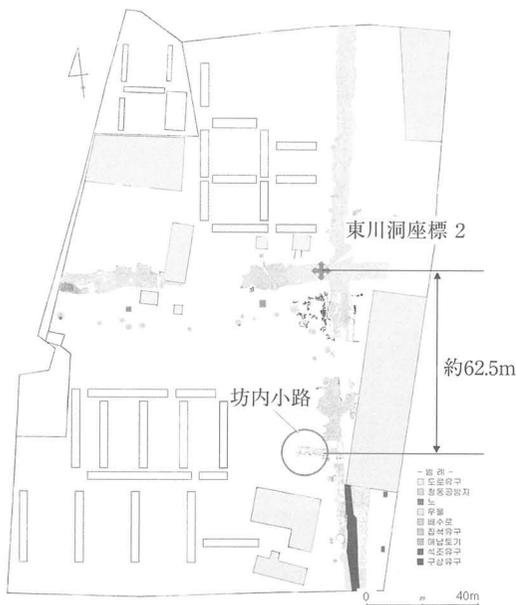


第2図 東川洞696-2番地遺跡および周辺遺跡位置図

いることが確認された⁶。前述の仮説のように、道路20尺、宅地（東西）430尺を基本にした450尺（159.75m）の単位で区画したとみたとき、東川洞696-2番地遺跡交差路上の座標2は、すでに調査された東川洞681-1番地遺跡の座標1から西に2ブロック離れた場所にあり、450尺（横）×350尺（縦）を基本単位とした三段階の都市整備の分割法が、この遺跡でも適用されたことが確認された。ところで、東川洞696-2番地遺跡で確認された路幅が、道路敷地20尺（7.1m）とする仮説に一致するかどうかの可否は、以下のように多少混乱の余地が残っている。すなわち、調査団の略報告書⁷の内容によれば、200mほど検出された南北道路の路幅が、北端部の場合、南端と中央に比べ1～2mほど狭い6～8m程であるが、1次調査で確認された南北道路の場合、路幅が14～15mほどであった。また、東西道路の場合も2次と最終の3次調査で確認された路幅は7～10mで、1次調査で確認された東西道路の路幅は、約9m内外であるとされている。それぞれの調査によって、互いに異なる道路区間を計測した結果、その幅が大きな差異を示したため、調査団では道路を1～4回にわたって改・補修した過程にともなう道路の拡張または縮小と捉えている。

もちろん、道路の改修過程で、道路の幅が小幅ではあるが変化することはすでに知られている。しかし、東川洞696-2番地遺跡でのように、主に7m内外の路幅を維持する道路が2倍以上にまで縮小・拡張されたことが事実であるならば、これは今まで確認されたことのない特殊な事例といえる。

ただ、この遺跡では、隣接する東川洞681-1、690-3番地遺跡とは異なり、道路の両側に



第3図 東川洞696-2番地遺跡遺構分布図



第4図 東川洞696-2番地遺跡全景

街区を区画するタムジャンが確認されておらず、道路の軸と線形が多少屈曲している点に示唆するところが多いといえる。つまり、道路の端に側溝やタムジャンがある場合は、例外なく道路の線形がまっすぐ整然としている反面、タムジャンが設置されなかったり流失した場合には線形が多少乱れやすいのである。こうした場合、砂利層の分布範囲それ自体を当時の路幅として算定することには、多少の無理があるといえる。

タムジャンが全く確認されない点については、Ⅲ章4節で別途論じることにするが、隣接する東川洞遺跡と同様に、側溝のかわりに道路の中央部に排水路を設置するものでは、有事の際には道路自体が排水の機能を持ち、この時に道路上面に敷かれた礫が周辺に押し流された可能性（ここにタムジャンが当初からなかったのであれば、このような蓋然性はより高まる）もあったろう。

次に、東川洞696-2番地遺跡では、王京の区画道路ではなく街区内部に通じるいわゆる小路が1条確認され、注目された。第3図のように、この小路は交差路の南西側に位置する街区に連結し、交差路の南側に続く南北道路から西側に分岐して、約3mくらいの路幅で12mほど検出された。

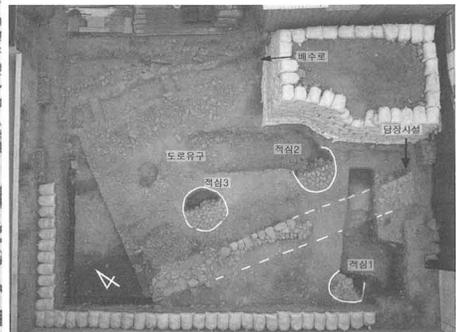
このような小路は、皇龍寺址東辺のS1E1地区⁸をはじめ、慶州博物館敷地内遺跡⁹と東川洞681-1番地遺跡や東川洞690-3番地遺跡などで確認されたことがあり、その性格はおおむね



第5図 東川洞891-10番地遺跡位置図



第6図 東川洞891-10番地遺跡遠景



第7図 東川洞891-10番地遺跡全景

王京の行政区域を区画する道路ではなく、坊の中央部に位置する家屋や施設に通じる小路と推定される。

東川洞696-2番地遺跡の東西方向の小路が注目を集める点は、他でもなくその位置にある。すなわち、近隣の東川洞681-1番地遺跡の小路が街区の中間地点を横切って設置された点を勘案すると、交差路（東川洞座標2）から南側に約62.5m離れた場所で検出されたこの小路は、東川洞一帯の地割の基本単位である南北350尺（124.25m）の中間地点に該当する可能性が高い。このような坊内部に通じる小路の位置を通して、東川洞696-2番地遺跡の街区規模を類推することができるようになったのである。

王京の最終拡大改編地域に属する東川洞一帯では、定型化された地割とともに、変形斜格子地割りもあったものと推定されているが、このような仮説に符合する遺跡の発掘が最近行なわれた。新羅文化遺産調査団が調査した東川洞891-10番地遺跡¹⁰である。2007年3月から5月にかけて、住宅新築敷地（165㎡）に対する発掘調査の結果、北西—南東方向の道路遺構とタムジャンなどが確認された。道路の南西辺に幅1.1mのタムジャンが残っており、道路北東辺には側溝が設置されていた。道路は、川原石を敷いて突き固めた3つの路面層が確認されたところをみると、何回かの改・補修を行ったものとみられ、その全体幅は約6m程である。道路（敷地）の境界であるタムジャンが片側にしか残っていなかったため正確な路幅は知りえないが、すでに確認された東川洞の道路のように、20尺（約7.1m）の規模であった可能性が高いと見られる。

次に、最近、新羅文化遺産調査団が調査した月城南側に隣接する仁旺洞412番地遺跡¹¹は、月城の南辺を流れる蚊川（南川）以南地域の王京整備の様相を明らかにするうえで大変重要な資料と評価できる。

遺跡の西側には伝仁容寺址と月精橋址が近隣にあり、東側には月城の東側の境界をなす南北道路と日精橋址が近い場所に位置している。これまで、月城の背後に該当するこの一帯では、都市遺跡が造営されていなかったと推定されてきたが、この調査で、南側溝を備える東西道路とタムジャンで囲まれた建物址や関連遺構が検出された。

仁旺洞412番地遺跡の東西道路は、8.4m内外の路幅をなしており、中心軸は真北に直交せず反時計方向に大きくふれている。道路の両側に位置する坊（街区）の区画をなすタムジャンもまた、道路と並行に設置されていた。一方で、家屋の境界のタムジャンや大部分の建物址はこれと異なり、真北に近い造営方位をなしていた。このような様相は、遺跡西側の伝仁容寺址でも確認された。すなわち、東回廊址東辺外郭のタムジャンと南北道路は、仁旺洞遺跡の道路や坊牆のように磁北を基準に4度ほど西にふれていたが、寺刹関連遺構はむしろ同じ角度だけ東にふれていた。

結局、寺刹や家屋などは真北にちかい造営方位をなしており、外郭道路やタムジャンは

特異にも反時計方向に中心軸が傾いていることが特徴である。昔の地籍図や衛星写真で見ると、月城の南側、狼山の西側一帯の地割痕跡が真北から反時計方向に大きくふれており、



第8図 月城周辺衛星写真

このような様相が最近の王京遺跡の発掘を通して立証されたことになる。

このように月城以南地域は、真北に合わせて月城の北（東）側で都市整備を進めた一段階とは全く異なる軸を用いて、別途の地割がなされたものとみられる。その時期は、仁旺洞遺跡や伝仁容寺址の出土遺物からみると、8世紀を中心とした三段階に属する。一段階の地域と隣接するこの一帯が、三段階にいたってようやく整備区域に編入された理由についてはⅢ章4節で検討することとし、ここでは月城以南の都市区画の様相を探ることとする。

第8図のように、6世紀に始まる一段階の王京整備の基本軸は、月城の南北中心軸（Y軸）である。この軸は、月城の3号と4号垓子の間を通り、仁旺洞556番地遺跡の西辺にある南北道路へと長く伸びる真北方向の軸線をなしている。一方で、月城の南側一帯は、どこを主軸にしてどのような理由で変わったのか明確ではないが、真北から大きく西にふれている。まず、月精橋址と都堂山を南北に連結するY'軸が注目される。都堂山は王室が国家的儀礼行為を周期的に執り行った神聖な地域として知られており、月城から都堂山を最も短距離で連結させた古道がY'軸線上にあったとみると、三段階地割の中心軸がここである可能性はより高く思える。

月城南側地域の地割方向が変化した別の理由として、効率的な土地活用のための措置という可能性も考慮してみることができないかもしれない。三段階の変形地割の西側の境界はいまだ不明であるが、東側については地籍を通して狼山までであったと推定できる。狼山と南川の間には細長く傾斜する広い平野が形成されており、このような地形では、格子地割りに比べ斜格子形態の地割りが土地活用においてより効率的であることは容易に推測できよう。

では、月城南側地域の区画単位が、同じ三段階に属する北川以北と同一であるのか、あるいは隣接する一段階地域と同一であるのかを探ってみよう。結論から述べると、これらとは全く異なる380尺×380尺規模の方格地割が行われていたようである。Y'軸とX'5軸の間の距離が約674.3m、すなわち1899尺と計測され、380尺単位の5倍数であることが分かる。ゆえに、日精橋の西辺橋台と伝仁容寺址東辺の南北道路（道路と右側タムジャンの境界線）の間は2ブロックに相当する。

また、日精橋と伝仁容寺址南側の境界を横切るX'軸と仁旺洞412番地遺跡の東西道路を通るY'1軸線の間の南北道路が同様に約137mと計測され、380尺（134.9m）の近似値をなしている。このように月城南側の三段階における都市区画の地割は、380尺を基本単位に行ったものと推定される。

一方、最近になって王京の北西側の範囲を推測できるような遺跡が調査されている。聖林文化財研究院が行なった2006年の慶州市見谷面金丈里438-6番地一帯における発掘調査の結果、統一新羅時代の道路遺構が確認された¹²。3時期にわたる遺構が隣接して、あるいは重

複して確認されたが、各期2~2.6m内外の路幅をなし、南東—北西方向（N-22~30°-W）を主軸としている。遺跡とその周辺一帯では、広大な耕作遺構（畑）が確認され、調査区域の西側には金丈里瓦窯址と多慶瓦窯址が分布している。このため、金丈里438-6番地遺跡で確認された道路遺構は、食料や物資輸送のための官道の役割を担ったものと推定されている。王京への物資輸送または慶州外郭および地方との交通のために国家が開設した幹線道路は、慶州徳川里遺跡¹³でも確認された。これらの遺跡は、王京改編のための都市整備の範囲が、北西側では兄山江（西川）、南側では内南面までは至らないことを示す事例とみることができる。

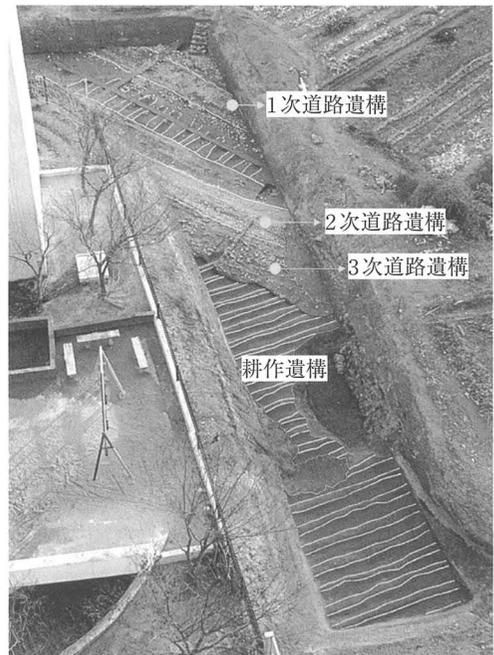
Ⅲ. 新羅王京の造営計画の変遷相

1. 王京内計画都市の建設時期

新羅が、坊里制を基礎に慶州盆地の中心部から計画的な都市整備作業を推進しはじめたのは、王権中心の集権体制が備わった新羅中古期になって初めて可能になったものとみられる。すでに、慈悲麻立干十二年（469）に坊里名を定めたという記録がある¹⁴。しかし、この時期の規格化された方格地割痕跡がこれまでに報告されたことがなく、単に六部の集落などを里に編成して、六部の自治権を制限し各部に対する影響力を強化する契機を準備したことを示すという見解（全徳在 2005）も一面の妥当性があるとみられる。



第9図 金丈里438-6番地遺跡配置図



第10図 金丈里438-6番地遺跡全景

『三国史記』地理条と、『三国遺事』辰韓条ならびに念仏師条にみられる坊里の数字と規模を、現在までの発掘成果と関連させて復元するにはまだ無理があり、坊に推定される王京の最小行政区画が確認され、その造営時期が出土遺物と主要施設との関係などで類推できる程度である。

新羅の23代法興王（514～540在位）と24代真興王（540～576在位）の時代は、対内的に体制を整備し、対外的には領域を大きく拡大させた時期である。

法興王は、十七等の官等制と骨品制を含む律令頒布（520）、兵部令（516）、兵部（517）、上大等（531）の設置、「建元」という独自の年号の使用などを通じ、国家の統治基盤を確立した。521年には梁国と国交を開き、528年に仏教を公認し¹⁵、532年には金官加耶を併合し洛東江流域を確保した。

続いて、真興王は554年に管山城（忠清北道沃川）の戦闘を通じ、漢江下流を領有し、中国との直接の交通路を確保し、555年には比斯伐（慶尚南道昌寧）に完山州を設置、562年の大加耶征服などで領土を大きく拡張させた。また、544年に興輪寺を竣工し、549年には梁国から仏舎利を伝達され、553年に皇龍寺建立を始めるなど仏教を護国的な性格で発展させた。551年には年号を「建元」から「開国」に変えて使用し、565年に陳国から仏教経論を伝達されるなど、梁に続き陳とも継続して交流を行ったことは周知の事実である。

このように新羅中古期の法興・真興王代には大々的な領域拡大とともに、国家の位相を強化するために一連の制度整備が広がり、この時期に王権強化の一つの手段として首都王京に対する計画的な整備が始まったとみることができる。

既存の王京六部の範囲は縮小された代わりに、新たな王京の改編が、慶州盆地を中心に段階別に行われていったのであるが、草創期は王城である月城と国刹である皇龍寺を中心に小規模な計画都市が造営された。以後、北宮と推定される殿廊址を中心に計画都市が拡大され、最終的に王京内の人口が急増する8世紀以降に、王京の外郭地域まで規格化された坊里とともに、一部で地形条件にあった変形地割が現れたと思われる¹⁶。

このように、王京内における計画都市の建設が三段階をへて完成された背景に対しては、様々な可能性を考えることができるであろうが、王京整備の直接的な要因とすることができる王権強化の進行速度と関連が深いものと思われる。すなわち、新羅王朝が貴族などの反発により初めから国家権力の頂点を完全に占めることができず、また戦争による国力の消耗がとて大きかったために、王京の整備を全地域にかけて一時に成し遂げることができなかったものと解釈される。このような事実は、真興王代の新宮（紫宮）築造や神文王代の達句伐遷都の座礁を通して容易に推測することができよう。

それならば、ここで王京の一段階整備が6世紀、遅くとも真興王代の皇龍寺創建伽藍の時期と重なったとみる見解（黄仁鎬 2004）と、王京の範囲が縮小調整された7世紀の神文王代

の坊を中心に計画都市が建設されたものとする見解（全徳在 2005）を比較検討してみよう。

前者は、皇龍寺の寺域が、度重なる再建によって拡張していくにもかかわらず、各期を通じて460尺（163.3m）規模で分割された4つの最小行政区域（坊）を占めており、周辺地割とも有機的な関係を結んでいるとみている。一方で、後者は創建または再建伽藍（645）の寺域と東辺に隣接する坊の規格の間に有機的連関性を探すが難しいために、2次伽藍以降のある時期（神文王代と推定）に皇龍寺周辺の坊などが、皇龍寺寺域を念頭に置かずに、独自の新たなプランを基礎に設計、造営されたものとみている。

後者の言及の通り、皇龍寺境域（最大南北281m、東西288m、約800尺）が4坊を合わせた規模（860尺、約305×305m）より多少小さいことは事実ではあるが¹⁷、これによって皇龍寺と寺域周辺の計画都市が互いに断絶したり、関連がなかったということでは決してない。

皇龍寺の東門は当初から無かったために、皇龍寺の東側に隣接する王京遺跡（S1E1地区）の北辺東西道路が皇龍寺内部に通じておらず、「T」字形の交差形態をなすようになったのである¹⁸。また、S1E1地区の南辺東西道路が西側の皇龍寺南門（正門）に一直線上には連結しないが、皇龍寺前面の広場に有機的に続いている点に注目する必要がある。すなわち、東西道路が皇龍寺正門に屈折して連結するのではなく、路面と同じく小砂利を敷いて突き固めた皇龍寺の広場が、東西道路を包むように南側で広がっているのである。

一方、皇龍寺とその東辺坊（S1E1地区）の間の南北道路は築成当初から、もともと計画されていた区画空間をはずれて創建伽藍側に6m以上偏っている。このように道路が確定された道路敷地の範囲をはずれて築造される例はほとんどないが、皇龍寺とその東側の宅地の間に排水のための長い帯状の水流地があったならば、状況は変わってくる。

沼を埋めて皇龍寺を建設した事実は、文献や発掘を通してすでに立証されたことである。北川からの氾濫の他にも、土台が低く随時水がたまりやすい場所を避けて、南北道路を皇龍寺がある西側に多少移動させたことも、無理のないことである。同じ理由によって、皇龍寺の東辺宅地も、もともと長方形で計画されたところを南北に長い長方形構造に変形して造営されたのである。発掘結果が示すように、水流地による皇龍寺周辺の排水も長くは続かずに限界にいたり、皇龍寺と東辺宅地の間に大型の人工河川を建設したのである。

このように、皇龍寺を当初画定された敷地よりも多少小さく造成した理由は分からないが¹⁹、広場や水流地、人工河川などと結びつけて皇龍寺が周辺の王京地割りと有機的に関係していたことはうかがえる。さらには、皇龍寺（敷地）を拠点として一段階の王京整備が始まったと推定している。

すなわち、真興王の親政時期と重なって、新宮の代わりに造営された皇龍寺²⁰は、慶州盆地を囲んでいる明活山（東）、仙桃山（西）、小金剛山（北）、慶州南山（南）の東西南北交差地点にあたる中心部にある。当時、ここは王陵や既存の寺刹が密集する月城の（北）西側と

は異なり、不毛の地に、新たに都市建設を適合させた地域だったのであろう。王京の中心は依然として月城であったために、月城を中心におき、既存の大陵苑地域と左右対称をなす月城の（北）東側に皇龍寺建設とともに、一段階の都市整備を漸進的に推進したものと推定される。

皇龍寺が創建されたのは、中国の都城制が典型をなしていた南北朝時代にあたり、法興王の時に確保した交通路を土台に、南朝（梁・陳）との持続的な交流を通じて、王京整備に必要な新たな文物を受容した可能性は排除できない。皇龍寺東辺の宅地のように、実際の居住時点が他に比べて多少遅れる場所もあるが²¹、一段階の整備が仁旺洞556番地遺跡のように、皇龍寺創建伽藍（真興王三十年、569年）の時期まで遡る点に注目しなければならないだろう。

2. 王京道路と地割体系

王京道路とは、地方に繋がる幹線道路や坊内小路とは異なり、ほぼ一定の軸と幅を維持し、格子または斜格子形態をなして王京内部を（長）方形街区で区画する道路を称する。これは、側溝または中央排水路を備え、交通や排水機能を担った。

すでに説明したように、王京内における都市整備は一度に終わらず、3段階にわたり、各期ごとに異なる地割体系に沿って行われたために、道路の規模や造営方位が複雑な様相を帯びている。これと関連して、60尺（約21.3m）幅の道路敷地によって、400尺×400尺規模の方格街区で区画する460尺（約163.3m）単位の地割が一段階の都市整備に適用され、二段階には40尺（約14.2m）幅の道路敷地によって一段階と同じ大きさの街区を区画する440尺（約156.2m）の地割が実施され、最終の三段階には道路敷地が20尺（約7.1m）に縮小され、宅地も430尺×330尺の大きさの長方形の街区に変形された東西450尺（約159.75m）、南北350尺（約124.25m）単位の地割法が王京整備に使用された点を、発掘結果を通じて明らかにしたことがある（黄仁鎬 2004）。この仮説は、東川洞696-2番地遺跡をはじめ最近の発掘成果を通じて、ある程度立証されている。

以前には、路幅の多様性を類型別に分けて、王京の行政区域単位（里・坊）との相関関係を求める試みも行ったが、現在では段階別に60尺、40尺、20尺幅と差異をおいて画定された道路敷地が、王京の最小行政区域である坊を区画する道路であることを明らかにしただけで、里との関係は不明である。

一括して同一の規模に設定された道路敷地には、通行量、周辺施設との関係などを勘案し、必要に応じて、大小の道路がそれぞれ設置されたものと思われる。数次にわたる改築を通して、路幅が多少変化することはあっただろうが、当初に画定された道路敷地の規模を超える例はまだ確認されていない。これまで大路に分類されていた慶州博物館敷地で確認された王京東外郭の南北道路と皇龍寺南門に繋がる東西道路は、割り当てられた道路敷

地全体または大部分を活用した事例とみなすことができるものである²²。

王京の拡大改編が段階別に推進されると、地割の基本単位が時期に従って、460×460尺→440×440尺→450(南北)×350尺(東西)の順で変化していったことは事実である。ただ、新たに整備された新都市の道路網の中で、旧市街地へと続く道路については、大きな河川が遮る特殊な場合を除いて、切り替わった地割体系と無関係に、既存の道路と屈折せずには有機的に連結するように設置された事実については、すでに言及したところである(黄仁鎬 2004)。

ここでは、王京内の都市整備の中核の役割を担った月城と王京道路網との関連性について簡略に指摘してみよう。月城の出入施設のなかには、城の外を通る幹線道路と連結するものもあり、このような幹線道路においては、月城の南北中心軸線上にある道路が当然中心だったと考える。月城の北側中軸線に位置する仁旺洞556番地遺跡で確認された南北道路は、北宮と月城をつなぐ朱雀大路ではないことが判明したが、月城に通じる主要幹線道路であることは明らかな事実である。

月城周辺では早くから防御用亥子施設が造成されたが、三国統一以後、王城の拡大とともに、造景を意図した石築亥子に変貌した。この時に設置された4号亥子とその東側に隣接する3号亥子は、それぞれ別途の護岸石築を備え、2つの亥子の間には10~20mの空間が残されている。これは月城の出入りのための空間と想定され、仁旺洞556番地遺跡で確認された南北道路の南延長がこれと連結しており注目される。まだ、王京の一段階整備の時期と符合する月城の出入施設が十分に明らかにされていないが、石築亥子が造成される頃まで、月城と周辺道路網が有機的な関係を成していたと類推することができそうである。

第8図のように月城の中軸線を通る王京道路の他にも、月城の東側と西側の境界をつくる道路網もすでに確認されている。すなわち、(満)月城の東側境界にあたる南北道路²³と、月城の西端部に接する月城と蚊川(南川)の向かい側の都堂山と南山を連結していた月精橋がそれにあたる。月精橋を中心に蚊川の南と北をつなぐ道路網が、月城の西側の端部分と有機的に連結する点で、景德王代と推定される王京の三段階整備の時期まで、月城と王京地割の間の有機的な関連性が持続していたことをうかがうことができる。

特に、月城の東西幅、すなわち月城左右軸の道路網の間の距離が460尺を基本単位とする一段階地割の6区画(ブロック)と同じ規模に該当する事実は、月城を中心に置いて皇龍寺(敷地)を拠点とすることで、王京内の都市を新しく整備しようとした、草創期の王京造営計画における月城の象徴的意味を明瞭にするものである。

3. 坊牆と通坊

家屋やその他の施設が設置される方形または長方形街区は、まず道路によって区画されたのち、四方外郭に設置された幅1m内外のタムジャンによってさらに区域が分離される。こ

ここで、王京の最小行政区域を設定するタムジャン、すなわち坊牆は、家屋の外郭のタムジャンと別途に設置されるものではなく、街区の四辺に位置する個別の家屋などのタムジャンが互いに接続する形態で組み合わさっている点を大きな特徴とすることができる。このとき、坊牆はおもに道路の側溝、または道路と直接接するものであるが、道路敷地全体が道路として100%活用されていない場合には、坊牆が何の施設もない空き地のような道路敷地に接することもあった。

これまで、小規模発掘地において道路の一部が調査されたときには、タムジャンが流失した場合を除外すれば、道路の両側でタムジャンが部分的にでも確認されることが一般的であった。しかし、東川洞696-2番地遺跡のように、南北道路が200m、東西道路が130m前後の長さで検出されているにもかかわらず、タムジャンの痕跡をほとんど探すことができない状況は、非常にまれな現象とすることができる。後代の攪乱のためにタムジャン全体が流失してしまったり、土石混築のタムジャンではなく木柵または垣根程度であった可能性も残っているが、当初からタムジャンが設置されていなかった可能性も排除できない。

東川洞696-2番地遺跡が、坊牆が設置されていない後者の場合であるならば、交差路を中心とした周辺の4つの街区の性格が何であったのかが気になりである。様々な可能性があるだろうが、まず、通坊の理由として、この地域が生産または流通のための空間であった可能性を提起してみたい。

これを裏づける根拠として、遺跡で確認された青銅製作と関連する工房址や作業場など生産関連遺構と内部で採集された多量の木炭と焼土塊、鋳型、るつぼ、青銅片そして各種の青銅および鉄製品のような遺物の出土様相などをあげることができる。また、大規模な製鉄遺構が密集する隍城洞が、この遺跡から近い距離にある点からみても、この地域が生産団地であったため、または生產品の流通と関連して、閉鎖的な坊牆が不必要な特殊な場所であった可能性がある。しかし、この点については、今後の細密な検証が必要である。

4. 月城南側地域の地割

斜格子地割など、変形した都市区画の様相は、芬皇寺とその東辺の皇龍寺展示館建設敷地遺跡ですでに確認されたことがあり、最近になって東川洞891-10番地遺跡と仁旺洞412番地遺跡でも確認された。主に大きな河川を挟んでいたり、山地と河川からなる長細い沖積台地を中心に、このような様相が顕著である。こうした地形条件は、山と川で囲まれた慶州盆地において主に外郭地域にあたり、月城北辺中心部から外郭に段階別に拡大整備が行われたために、主に最終の三段階にこのような変形地割が現れたものである。

変形地割は結局、限定された土地の活用性を高くするためのものであり、これは三国統一以降の人口増加による結果と推定されている。また、段階別に地割単位を引き続き縮めていくことは区域別に身分差を設けるためもあるだろうが、不必要な道路敷地を縮め、家

屋などを整えて配置するなど変形地割と同じ背景によるものであろう。

最近、月城に近接する南川以南地域でも都市遺跡が発掘されているが、ここでは今まで知られていなかった全く新しい斜格子地割痕跡が確認された。道路敷地と宅地を合わせて、それぞれ380尺(約135m)を基本単位とする方形地割がそれだが、これは同じ三段階に属する北川以北地域ともまた異なる地割法であることが注目される。

この月城南側一帯は、北側で一段階地域と接しながらも三段階(8世紀)によく都市整備区域に編入された。長い間、月城の背後にあたる新城地域として確保されてきた所であったが、南山側に通じる交通量が増加し、不足する宅地の準備のためにも、遅れて日精橋と月精橋を設置し、これと有機的に結びつく道路や新市街地を造営したものとみられる。

IV. おわりに

以上、王京の段階別造営計画について、既存の仮説を最近の発掘結果と比較して検証してみた。東川洞696-2番地遺跡の交差路遺構が、すでに知られた近接の遺跡との間に、東西450尺、南北350尺を地割の基本単位として、互いに有機的な関係を結んでいることを知ることができた。また、仁旺洞412番地遺跡の調査内容を通して、既に知られた三段階の都市計画と全く異なる月城以南の独特の地割体系を明らかにすることができた。

新羅王京の研究は、「まるで下絵(史料)がほとんど無く、ひとつの「月城復元図」というパズル板に、発掘現場から抽出した考古情報のかけらを一つひとつ複雑に組み合わせていく容易ならざる作業である」と表現できる。

王京の改編による、都市整備の様相は実に複雑かつ特殊であるから、実証的な考古学の方法論がより要求される。のみならず、王京遺跡の調査にあっても、道路(敷地)や坊牆、交差路などの標識遺跡の座標や方位など、重要な考古学的情報を互いに共有できるように、正確な記録などに関心を持つことが必要であろう。

註

- 1 장경호 「慶州 月城의 調査研究와 歴史的 意義」『경주 월성의 어제와 오늘, 그리고 미래』 국립경주문화재연구소 학술심포지엄 발표요지, 2007.
- 2 한국문화재보호재단 「경주 동천동 공동주택 건설부지내 유적 발굴조사 - 1차 지도위원회 자료 -」2006. 한국문화재보호재단 「경주 동천동 공동주택 건설부지내 유적 발굴조사 - 2차 현장설명회 자료 -」2007. 한국문화재보호재단 「경주 동천동 공동주택 건설부지내 유적 발굴조사 - 3차 지도위원회의 자료 -」2007.
- 3 동국대학교 경주캠퍼스 박물관 「경주시 동천동 690-3번지 황성초등학교 강당부지내 도시유적발굴조사 - 指導委員會議資料 -」1999. 東國大學校 慶州캠퍼스 博物館 『王京遺蹟 I - 隍城初等學校 講堂敷地-』2002.
- 4 동국대학교 경주캠퍼스 박물관 「경주 동천동 택지개발 사업지구내 유적 발굴조사 (현장설명회 자료)」1997. 동국대학교 경주캠퍼스 박물관? 동국대학교 박물관 「동천동7B/L내 도시유적

- 발굴조사보고 -指導委員會 會議資料-]1998. 동국대학교 경주캠퍼스 박물관·경주대학교 박물관 「경주시 동천동 7B/L내 도시유적 발굴조사보고 - 第3次 現場說明會資料 - (追加 資料分)」1998. 東國大學校 慶州캠퍼스 博物館「王京遺蹟 III -慶州市 東川洞 7B/L 内 遺蹟-」2005.
- 5 慶州東川洞共同住宅建設敷地内遺跡を、便宜上「東川洞696-2番地遺跡」と呼ぶことにする。
 - 6 2つの遺跡の航空写真を慶州市の衛星写真に合成し、これを都市数値地図に重ねて計測した結果、この時期に2つの座標間距離に10m前後の誤差が出たことを明らかにしておく。
 - 7 한국문화재보호재단(2006·2007)。上記の1～3次指導委員会資料。
 - 8 国立慶州文化財研究所「新羅王京」発掘調査報告書 I、2002。
 - 9 国立慶州博物館「国立慶州博物館敷地内発掘調査報告書」2002。
 - 10 (재)신라문화유산조사단「경주 동천동 891-10번지 근린생활시설 및 단독주택 신축부지내 유적 발굴조사 약보고서」2007。
 - 11 (재)신라문화유산조사단「경주 인왕동 412번지 단독주택 건립부지내 문화재 발굴조사 -약보고서-」2007。発掘調査の結果、東西道路と建物址 5基をはじめ、関連遺構を検出した。
 - 12 (財)聖林文化財研究院「慶州金文里遺跡IV」2006。
 - 13 (재)영남문화재연구원「경주 덕천리 유적 현장설명회 자료」2006。慶州内南面徳川2里484-2番地一円の徳川里遺跡では、斯盧国と関連する1～3世紀の大規模墳墓群などとともに三国時代以降の道路遺構や溝状遺構が確認された。
 - 14 『三國史記』卷 第三 新羅本紀 第三 慈悲麻立干十二年條「十二年, 春正月, 定京都坊里名…」。
 - 15 『三國史記』新羅本紀 法興王十五年(528年)「肇行佛法」。
 - 16 二段階の整備は、神文王代、最終三段階の整備は、景德王代に実施されたものと推定している。その中で、王京の二段階整備に対しては、先に統一期直前である北宮(殿廊址と推定)の造成時期とともに行ったものと推定したことがあるが、北宮の建立時期について正確な考証とともに統一新羅の国家制度を整え、王権を確立した神文王代の可能性も注目してみる必要があると思われる。これについては、今後より精密な検討を行う予定である。
 - 17 文化財管理局・文化財研究所「皇龍寺 遺蹟發掘調査報告書 I」1984, pp.42-43。この報告書の内容と異なり、全徳在(2005)は、最大に拡張した皇龍寺の寺域を南北284.65m、東西278.65mと見ている。一方、皇龍寺が展開する4つの坊の規模(860×860尺)は、2つの街区(800尺)と一つの道路敷地(60尺)空間を合わせた規模である。この時の尺度は、東魏尺(1尺=0.355m)である。
 - 18 皇龍寺周辺の道路網がいつ造成されたとしても、東門が存在したのであれば、東西道路と連結する場所に設置されるはずであるが、発掘調査の結果、どのような門址も確認されていない。
 - 19 宮闕をつくろうとしたが、寺刹に修繕した当時の社会的背景と全く無関係ではないものと見られる。『三國史記』新羅本紀眞興王十四年(553年)「春二月 王命所司 築新宮於月城東 黃龍見其地 王疑之 改爲佛寺 賜號日皇龍」。
 - 20 皇龍寺中金堂が、太極殿の構造や規模と似ているという見解(양정석 2000)も提示されたことがある。
 - 21 実際、居住時点が遅れた理由とは、長い戦争により工事期間が長引いた場合と、貴族勢力の反発で区画整備された王京地域への移住が遅延された場合を想定してみることでよい。
 - 22 王京の区画と直接関連するのは、道路設置のために準備された道路敷地であって、道路それ自体ではない。改築による路幅の変化が発生するという道路の特性上、地割を究明する際において、道路の中心軸間の距離はそれほど大きな意味を持たないとみる必要がある。
 - 23 皇龍寺西辺に位置する廃寺址西側の南北道路と慶州博物館内部の発掘調査で確認された南北道路の連結線上にある南北道路をさす。

引用参考文献

- 박방룡 「新羅 都城遺蹟의 發掘과 研究現況 -月城을中心으로-」『경주 월성의 어제와 오늘, 그리고 미래』
국립경주문화재연구소 학술심포지엄 발표요지, 2007.
- 양정석 「新羅 皇龍寺, 北魏 永寧寺 그리고 日本 大官大寺 - 5~7세기 동아시아 都城制와 관련하여 -」
『韓國史學報 제 9 호』高麗史學會, 2000.
- 장경호 「慶州 月城의 調査研究와 歷史的 意義」『경주 월성의 어제와 오늘, 그리고 미래』국립경주문화재
연구소 학술심포지엄 발표요지, 2007.
- 張容碩 「新羅 道路의 構造와 性格」『嶺南考古學』38, 嶺南考古學會, 2006.
- 全德在 「新羅 坊里制의 施行과 그 性格」『신라문화재 학술논문집』26, 2005.
- 全德在 「新羅의 王京과 王宮」『경주 월성의 어제와 오늘, 그리고 미래』국립경주문화재연구소 학술심
포지엄 발표요지, 2007.
- 黃仁鎬 『慶州 王京 道路를 통해 본 新羅 都市計劃 研究』東亞大學校碩士學位論文, 2004.
- 黃仁鎬 「新羅 王京의 變遷 - 道路를 통해 본 都市計劃 -」『東アジアの古代文化』126号, 古代社會研究所,
大和書房, 2006年.

新羅 王京의 造營計劃에 대한 一考察

黃仁鎬

요지 본 논문은 新羅 王京의 造營計劃을 가장 잘 반영하고 있는 道路(敷地) 및 坊牆 등 표식적인 유구를 대상으로 하여 왕경 내 도시정비의 변화상을 추적, 복원하는데 목적이 있다. 신라는 6세기부터 왕권 신장을 위한 제도 및 체제 정비를 본격적으로 시행하였고, 이와 더불어 새로운 도시계획(坊里制)을 바탕으로 한 왕경 개편을 추진하였다. 그러나 이것이 당시 정치적 상황 등과 맞물려 일시에 실시되지 못하고, 적어도 3단계를 거치며 왕경의 중심부에서 외곽을 향해 도시 정비가 점진적으로 이루어졌던 것으로 보인다. 발굴 결과 단계별로 460×460척, 440×440척, 450(동서)×350척(남북)으로 약간씩 수정된 지할 체계가 확인되고 있으나, 대체로 신구 지역이 유기적으로 연결될 수 있도록 하였다. 최근 월성 남쪽 지역의 조사를 통해서도 380×380척의 또 다른 지할 흔적이 확인되었고, 기타 외곽 지역에서도 사격자 형태의 변형 지할이 확인되어 왕경 내 도시 정비의 다양성을 살펴볼 수 있게 되었다.

키워드 : 新羅 王京, 坊里制, 道路敷地, 街區, 地割, 均等分割方式, 通坊

A Study of the Construction Plan of Silla Capital

Hwang In-Ho

Abstract : The purpose of this study is to understand the regularity of city planning and land division system adapted to systemic improvement of the capital of Silla and to investigate the changing trend depending on the stages by comparing and analyzing roads and villages/fences which reflect design and construction of the capital of Silla most. The ancient roads in Gyeongju are divided into three types including a broad, a middle and a narrow road. The width of road was likely to be determined depending on the transferring degree of people and materials, connection with a principal road and positions of circumferential facilities. The important factor in land division system of the capital city was not the actual width of road but the road site. Therefore, it is supposed that so-called 'Uniform Division Method' was adapted to land division system of Gyeongju. Uniform division method means that road and building sites are divided alternately into uniform sizes with certain directivity. Silla reordered the existing area instead of constructing new city while introducing castle town system of new concept and was born again as the systematical capital. It was accomplished gradationally but not completed all at once in comparison with adjacent countries' capital cities. First of all, the beginning of the urban plan was achieved based on Hwangryoung Temple during or after constructing Hwangryoung Temple and used road lot of 60 cheogs and square building site of 400 cheogs as basic unit to divide the area by 460 cheogs in east/west and south/north direction. The land division system of the second step urban plan used road lot of 40 cheogs and square building site 440 cheogs as basic unit to divide the area by 460 cheogs in east/west and south/north direction. This system reduced the width of the road lot and retained the building land size comparing with the first step. The second step urban improvement meant the first capital expansion after Bangri system and the period was similar to the northern palace construction.

Since land division system of the third step urban plan established in 8th centuries standardized its standard unit as road site of 20 cheogs and square building site of 430 cheogs from east to west and 330 cheogs from south to north in size adopting partition which divides to the land by 450 cheogs from east to west and 350 cheogs from south to north, the size and type of its road site and building site largely changed as compared to the first and second step.

The fact of step by step escalation in the capital city of Silla can be conformed through the building method of roads besides changes of land division system and buildings. Fundamental background of Silla rearranging and reorganizing its capital city into a new structure by amending the building plan of the capital city several times is to allocate location of building site and its size differently depending on one's social position and to take excellent effect of rigid control system, symbolized in a high fence on the out-wall, that Bangri system has as a political means to strengthen its regality and maintaining its system. However, continued buildup of regality did not seem to go well in the first place. All of historical evidences that transfer of the capital was ruined in a planning step, the whole capital region was not fully organized at a time but on a small scale in the beginning and the final reorganization was accomplished after the United Silla Dynasty, can be analyzed for the same reason.

keywords : Silla Capital, bangri system, road site, square building site, land division system, uniform division method